

牛肉汚職の

横田哲治 著

ビーフマフィア

ドキュメントノベル

黒い霧

牛肉汚職の 黒い霧

横田哲治 著

ドキュメントノベル

ビーフマフィア



著者略歴

横 田 哲 治

昭和16年上海に生れる。36年長崎県立諫早農業高校卒業。戦後長崎県の開拓地に入植した両親と牧畜業を営む。住友軽金属勤務を経て、42年オーストラリアへ渡り牧畜経営を実習。その後オーストラリア商社の東京支社勤務を経て、49年より食肉通信社国際部海外情報担当記者として活躍。52年『牛肉はなぜ高いか』を執筆後退社して現在フリーランサー。著書——『牛肉はなぜ高いか』(1977)

ビーフマフィア——牛肉汚職の黒い霧

昭和54年7月5日 初版発行

¥ 980

著 者 横 田 哲 治

©1979 Tetsuji Yokota

発行所 ダイヤモンド社

郵便番号 100
東京都千代田区霞が関 1-4-2
編集 電話 東京 (504) 6403
販売 電話 東京 (504) 6517
振替口座 東京 9-25976

落丁・乱丁本はお取替えいたします

享有堂印刷・高陽堂製本
0330-070280-4405

まえがき

四月二十三日、南太平洋諸国を訪ねるため機上の人となった。いつものくせで、ベルト着用のサインが消えないうちに座席の前のポケットをさぐっていると、なかから以外なものが出てきた。

「日本へのお土産にオーストラリア産特選牛肉はいかがでしょう」

案内状は、昨今いわれるところの「国際化時代」にふさわしく英語と日本語の二本立てで書かれている。

成田空港を飛びたつたのは午後九時を過ぎていたので、夜の早い私は眠気がさしていた。だが、ペーパーを読んでいるうちに眠気は吹っとんだ。

案内状には「ビーフ・サービス申込書」がついていて、その殺し文句は「日本でとても高価な牛肉は、ご家族やお知り合いの方に喜ばれるオーストラリアからのお土産として、何よりです」とある。

そして――。

五月二十九日、国際空港である成田は海外からの帰国の人でごったがえしていた。税関の検査待ちのなかに、とりわけ目立つグループがあった。旅人は申し合わせたように純白の発泡スチロール容器を二、三個、持っていた。

その容器の中には海外では安いといわれる牛肉がいっぱい詰まっていた。これが、経済大国とよばれる日本の現状であると思うと、なぜかわびしくなった。

涙ぐましいまでの畜産、農家保護のために、日本の牛肉はなぜ高価でなければならぬのだろうか。

農林水産省、畜産振興事業団は、牛肉輸入に関し、二五％の関税をかけたうえ、輸出価格と同じくらいの調整金を公然にとっている。これも国内の畜産農家保護のためといわれてきた。はたしてそうだろうか。肉牛生産農家保護のためには増やしてはならないはずの輸入牛肉は昭和五十七年には一三万五、〇〇〇トン輸入することになっている（五十三年は一〇万七、〇〇〇トンだった）。

そして、輸入牛肉に対し、最も強力に反対する畜産団体の一つである全農（全国農業協同組合連合会）は、組合貿易という組織で輸入牛肉を独自のセールス・ネットワークで販売している。全農は東京・大手町にある。その地下のコーナで輸入牛肉は売られていたが、最近、中止になった。その理由を食肉課のAさんは「地方から上京した農協関係の人がきて、うるさくい

うものですから、人目につかないところで売ることになりました……」

私は、現在、畜産農家保護政策が真に作動しているとは思わない。むしろ、いいかげんな農家保護だったら、最初から言わないほうが良い。

不合理な農家保護政策のために、消費者と生産者が被害者になるような政策は是正されなければならぬと確信している。

ここ数年間、わが国の牛肉事情は急速に変化を遂げているように思う。第一に、牛肉の消費量の伸びだ。昨年は一一％増えている。その理由の一つに、一三兆円に達した外食産業が取り扱うハンバーグやステーキが爆発的に増えていることがあげられる。第二に、牛肉の輸入量は着実に増え続けている。

だが、肝心の国内生産は頭打ち。当然のことながら、東京都中央卸売市場食肉市場の牛肉の卸売価格は高値で推移している。また四十八年当時、ぬれ子（乳用雄子牛）は一頭当り一万円だった。その子牛が、いま八〜一〇万円（生体重約五五キロ）にハネ上がっている。窮余の策の外国からの輸入の子牛は「焼け石に水」にすぎない。

本書は、暗中模索を続ける日本農業のなかで、どうすれば牛肉が安定的に確保することができるか考えてみたかった。

そして、牛飼いの体験をふまえて「農家保護」という意味を問い直してみるために、あえて

ペンをとらざるをえなかった。

取材を通じて、いま、保護されているのは「農林議員、高級官僚、外郭団体」などではないだろうかと思ひ、いまの牛肉輸入政策に深い疑念を抱いている。

本書は、山あいの牛飼ひ農家の牛舎の窓から政治の世界を直視してみたものである。ここ二年間、陰に陽に内外の多くの人から励ましのことばを受けてきた。いわば、本書は、それらに対する私のささやかな答えともいえる。

一九七九年六月

横田 哲治

装幀——川畑博昭

目次

まえがき

第1章 消えた巨億の“調整金”

3

アメリカ大使館のトップ・シークレット 4

農家保護の美名の下で 9

巨額な使途不明金¹²

日本のミート・マフィアII食肉ギャング²²

名目だけの畜産農家保護²⁹

第2章 捜査二課——外郭団体の謎

39

配合飼料関係の七つの外郭団体⁴⁰

外郭団体は何のために存在するのか⁴⁴

大手ハムメーカーの戦略⁵⁰

ジャーナリズムは何を報道したか⁵³

動き出した警視庁捜査二課 61

輸入牛肉の隠語は「ダイヤ」 67

調整金の黒い疑惑 71

第3章 地検特捜部

農林議員の汚職 80

業界と行政のスキャンダル 85

「臭いものにフタ」の論理がまかり通る 92

警察はいったい何をしているのか 96

週刊誌の追跡企画はなぜつぶされたか 99

食肉業界の政界工作 103

汚された農相の椅子 107

第4章 警察への疑念

もの言わぬ牛は訴える 116

「日本人と牛肉」の歴史 123

神戸肉の本場にまき起こった内ゲバ騒動 130

警察と業者の深い癒着関係 135

空中分解した兵庫県警の捜査 139

第二ラウンドを迎えた業界の内ゲバ 142

“不合格”の内臓までが流通市場に流れている 145
組織暴力もからんだ牛肉横流し事件 149

第5章 最後の捜査

ある投書 156

大阪地検の検事がまとめた牛肉汚職メモ 161

関西主婦連盟幹部の腐敗 164

アメリカ大使館が追跡調査した牛肉汚職 169

大阪地検検事の焦り 173

最高検察庁からの「ゴー」サイン 175

アメリカ大使館レポートの二つのポイント 178

全農の若い職員怪死 181

初の全国捜査会議 186

某銀行が調べた「外郭団体の疑惑」 189

牛肉安売りに踏み切った業者を妨害 191

一番悪いヤツは誰なのだ 194

ビーフマフィア

——牛肉汚職の黒い霧——

第1章

消えた巨億の
“調整金”

アメリカ大使館のトップ・シークレット

新緑が目にしみる四月十九日の昼下がり、東京・杉並区高井戸に住む高尾英雄の家の電話が鳴った。

「アメリカ大使館の経済公使の秘書でございます。高尾さんのお宅でしょうか」

アメリカ大使館にしては珍しく、若い女性の張りのある声だった。大使館にしては珍しく、というのは、高尾が知る限り、アメリカ以外の大使館に働く日本人女性は二〇代の若い人が多いのに、アメリカ大使館は年配者が大部分を占めているからだだった。

近藤ちえ子と名のる秘書は、経済公使に変わって用件を告げた。いま、アメリカの『ニューヨークジャーナル』のワシントン支局長であるチャップマン記者が大使館を訪れ、取材のために会って欲しいといっているが、協力してもらえるか？ とのことだった。

高尾はいま「日本の畜産農家を守り、安全で安い牛肉を普及させる会（JSBP）」の代表をつとめている。外人記者の取材目的を聞く前に牛肉のことだと直感した。高尾はけっして暇な毎日ではなかったが、アメリカ大使館の経済部公使秘書の紹介でもあり、都合をつけることにした。

翌朝九時。ホテルニューオークラのロビーは朝食をとる旅行者でごったがえしていた。中国

第1章 消えた巨億の“調整金”

語、スペイン語あり、多彩だった。そのなかで聞きなれた英語だと思って耳をすましていると、オーストラリアからの旅人と思われる六〇代の老夫婦が通り過ぎていった。

チャップマン記者の部屋は一〇一三号室だった。本館の一〇階である。面識のない高尾は、エレベーターで一〇階まで上がった。館内電話でチャップマンと話したとき、トラブルを避けて会う場所はどこかということになった。外国生活の経験のある高尾は自分のほうから「部屋に訪ねていきましょう」と提案した。

これも面識のない二人が会うには最良の方法だと考えたからだ。一〇階でエレベーターは止まった。ドアを出て、二、三步踏みだしたとき「ミスタータカオ」と呼びとめられた。

「高尾です」

「わたし、リチャード・チャップマンです」カタコトの日本語だった。軽い握手をかわした。初対面のときの握手は儀礼的なもので、軽く手が触れる程度にする。西洋のご婦人とするときは必ずそうである。相手が握手を求めないのに「ハウ・ドゥ・ユ・ドゥ」とばかり、手をギュと握れば「まあ、礼儀知らずな人」と、不名誉な烙印を押されてしまう。

チャップマン記者は蝶ネクタイを締めた六〇代の銀行マンというタイプだった。チャップマン記者と高尾は再びエレベーターに乗り、一階にあるアゼリアで朝食をとることにした。

アゼリアの入口から右側の一番奥まではかなりの席数がある。チャップマンは、入口に近い

ところに空席があるのにどんどん先に立って歩き、席を探す様子だった。

高尾は内心「なぜ」と思ったが、口には出さなかった。

チャップマンが立ち止まり、席をすすめてくれたのは、奥のコーナーで人目につきにくい場所だった。チャップマン記者が細やかな神経の持ち主であることがうかがえた。

ワシントン支局長である彼は、日本の牛肉の高値のウラ（背景）に最大の関心をみせた。訪日は二度目だった。最初は故アイゼンハワー大統領が訪日したとき、随行記者の一人として日本の土を踏んだ。

ニューヨークジャーナル社が派遣したわけではなく、自腹をきって取材し、記事を書いたというエピソードがある。そこに、記者としての積極的な姿勢があり、ある種の問題をかぎつけたとき、追求する迫力が感じられた。

彼は、日本における取材の重点を牛肉問題にしぼり、日本政府の高級官僚の牛肉汚職を具体的に報道することに最大の努力を傾けた。

ワシントンの農務省は、日本向け牛肉輸出を大幅に増やすことに、必ずしも懸命ではなかった。日本の牛肉行政を動かす農林議員と高級官僚の汚職をタネに、日米通商交渉を有利に展開することにあった。

チャップマン記者の訪日の目的は、五月三日、ワシントンでの日米首脳会談にそなえて、日